

中国で育てる「富士フィルム労働組合の森」 —15 年間、絶やさず続く緑化ボランティア



富士フィルム労働組合
中央執行委員長 浅房勝也

1934 年に創立され 80 年近い歴史を持つ富士フィルムグループは、「誠実かつ公正な事業活動を通じて企業理念を实践し、ビジョンを実現することにより社会の持続可能な発展に貢献する」という CSR の考え方の下、さまざまな活動を国内外で展開している。特に写真フィルムの製造に清浄な水と空気が不可欠であったことから「環境配慮・環境保全は企業活動の根幹を成す」という意識が創業以来受け継がれており、現在も環境問題へのさまざまな取り組みに力を入れている。

今回は数多くの取り組みの中から特に、富士フィルム労働組合が 1998 年から毎年継続して取り組んでいる中国（恩格貝／内モンゴル自治区）での「緑の協力隊」という緑化ボランティアの活動について紹介したい。

組合設立 50 周年記念で全員参加

富士フィルム労働組合設立 50 周年を記念して、組合として何か社会貢献活動をしようとの機運が盛り上がり、いろいろな案が検討された。その中で、当時クローズアップされていた環境問題に取



植林のため水のバケツリレーをする参加者たち

り組み、さらに組合員にグローバルな視野を育みたいとの思いがあった。また、黄砂や酸性雨など日本にも身近な影響があると考えられた等々の理由で、中国での植林活動を選んだ。植林はグリーンを連想させ、それは当社の企業カラーとも合致した。そこで、組合員全員が何らかのかたちで参加できるように「グリーンスマイル基金」を立ち上げ、毎月の給料の下 2 けた分に相当する金額を活動資金として供出することにした。

同時に具体的な植林活動の場所を模索したが、まずは調査と体験のために、ある NPO が中国で実施している植林のプログラムに組合員 2 名を派遣した。その場所は北京市の北西部にあるクブチ砂漠（恩格貝）で、北京から夜行列車で一晩ゆられて行く場所だったが、これならやれると判断し、翌 1998 年から社内でボランティアを募って第 1 次隊を派遣した。

参加者は有給休暇を利用し、費用も一部は基金から援助されるが、自ら負担している。その後この活動は紆余曲折があり、2002 年の 5 次隊からは北京の北方にあるホルチン砂漠（内モンゴル自治区）に活動の場を移したが、2012 年の 15 次隊まで 15 年間も途切れず続いており、累計参加者数は 282 名にのぼっている。

SARS にも反日暴動にも負けず

2003 年には SARS 問題が勃発し派遣が危ぶまれたが、どうしても行きたいという社員もおり、時期を遅らせ参加人数も 2 名に減ったが、何とか活動は途切れなかった。また、2005 年には中国



現地での「緑の協力隊」15周年記念式典(左から2人目が筆者)
各地で反日暴動があり、社内でも中国出張を見合わせたほどだったが、その時も、時期を遅らせて7月にボランティアを派遣した。

その際に実感したことは、主要都市で反日暴動があっても、われわれが緑化を進めている地方の村では、反日感情は全く見られず、現地の農民の対応はいつも通りの穏やかなものであった。メディアが報道する激しい政治的な動きと、地方に住む一般庶民の感情とのギャップを痛感させられ、自分の目で事実を確認することの重要性も痛感した。

活動を繰り返す中で、われわれのボランティア活動について当社の中国現地法人に説明したところ、彼らも大変興味を持ち、2006年からは中国現地法人からの参加が始まり、その後も順調に人数も増えている。

ところが、活動開始後10年を過ぎたころから、参加経験者の数も増え、また熱心な社員の退職などもあり、活動への参加に中だるみが出てきた。また、当初は植林に適した5月のゴールデンウィークごろに派遣していたが、その時期、工場は動いており、7泊8日の連続休暇は取得しづらい職場もあった。そこで、より参加しやすくなるように、派遣時期を5月から7月下旬～8月初旬に変更し、夏季一斉休暇が利用できるタイミングにして、派遣日数も5泊6日に減らした。

単なる植林から自分たちの森の再生へ

活動の内容は、従来の単に苗木を植える植林ではなく、以前そこにあった森・みどりを再生するという緑化活動に変わってきている。例えば、植

富士フィルムグループ

企業理念

わたしたちは、先進・独自の技術をもって、最高品質の商品やサービスを提供する事により、社会の文化・技術・産業の発展、健康増進、環境保持に貢献し、人々の生活の質のさらなる向上に寄与します。

ビジョン

オープン、フェア、クリアな企業風土と先進・独自の技術の下、勇気ある挑戦により、新たな商品を開発し、新たな価値を創造するリーディングカンパニーであり続ける。

える木の種類も、もともと地元にあった何種類かの木を選んで植え、手入れすることで森の再生を進めている。

また、現地NPOとも相談し、「富士フィルム労働組合の森」と名付けた区画を設定し、地元農民の協力も得ながら継続的に維持管理することで、自分たちの植林した森の成長を参加者自身が実感できるようにした。また、そのことにより農民の側にも参加意識が深まり、参加者と地元農民との交流も深まった。また、荒れた土地に森が再生され、昔住んでいた鳥類も戻り、間伐材も燃料として利用できるようになり、地元にもさまざまなメリットをもたらしている。

参加者にとっては、この活動を通じて「誰かのためにではなく自分自身のために参加する」というように意識にも変化が起きている。また、日本での多忙な日常業務を離れて、自分自身をじっくり見つめ直す機会にもなっていると感じている。

われわれの活動は中国でも評価され、他の村からも同様な活動をやって欲しいとの要望が来るようになった。われわれとしては、現地の人たちが日本からのボランティアに頼らず、自分たちの手で森の再生を始めるようになるまでこの活動を継続したいと思っている。また、これからは、他のグループ企業労組にも参加を呼び掛けて活動の幅を広げていきたいと考えている。 ■

◆富士フィルムホールディングス(株)のCSR
[http://www.fujifilm.co.jp/corporate/
environment/index.html](http://www.fujifilm.co.jp/corporate/environment/index.html)